今週の為替相場見通し（2023年10月30日）

総括表			先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		149.32 ～ 150.78	149.65	148.00 ～ 152.00
ユーロ	（ドル）		1.0521 ～ 1.0695	1.0565	1.0440 ～ 1.0640
（1ユーロ=）	（円）		158.00 ～ 159.90	158.12	156.50 ～ 159.50
英ポンド	（ドル）		1.2070 ～ 1.2288	1.2122	1.1900 ～ 1.2400
（1英ポンド=）	（円）	*	181.05 ～ 183.76	181.38	179.00 ～ 184.00
豪ドル	（ドル）		0.6271 ～ 0.6400	0.6334	0.6260 ～ 0.6450
（1豪ドル=）	（円）	*	94.25 ～ 95.90	94.80	94.00 ～ 96.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　部坂　洋太朗

（1）今週の予想レンジ：　148.00 ～ 152.00 円

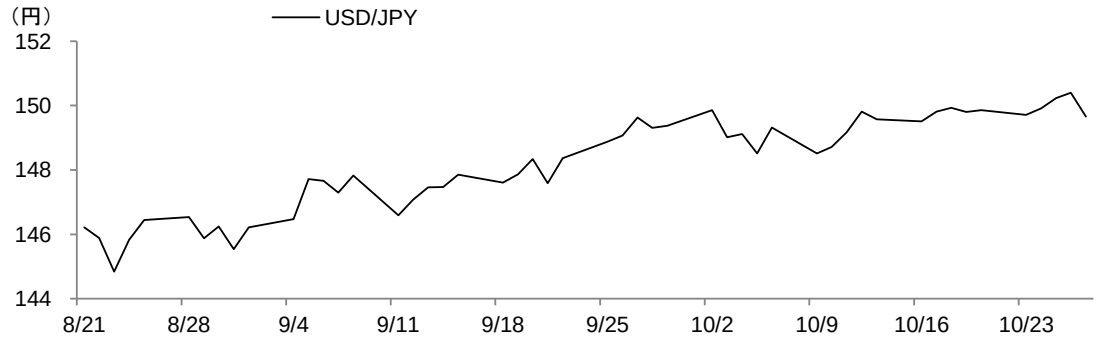
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、年初来高値を更新したのちに上値が抑えられる展開となり150円割れでのクローズとなった。週初23日、149.89円と20日クローズ対比上昇してオープンしたドル/円は、オープン直後に150.11円まで上昇するもすぐさま下落に転じ、その後は材料に欠ける中、149円台後半でのレンジ推移となった。24日、ドル/円は上値が重い展開となり一時週安値の149.32円まで下落となったが、米金利上が上昇に転じると149円台後半まで反転上昇となった。25日、ドル/円は149円台後半で方向感のない推移となったが、海外時間に米9月新築住宅販売件数の良好な結果を受けて150円台前半まで上昇した。26日、ドル/円はアジア時間から円売りの流れが優勢となり年初来高値水準となる150.78円を付けた直後に150円割り込む値動きの激しい展開となったが、すぐさま値を戻し150円台前半での推移。海外時間では、米7～9月期GDPの結果が事前予想を上回ったが、買いは続かず引き続き150円前半での推移となった。27日、ドル/円は終始上値の重い展開。海外時間には一時150円を割り込み149.65円で越週した。

今週のドル/円は中銀イベントを控えてボラタイルな展開を予想する。先週発表された日10月CPIの結果も上振れとなったことで、30日（月）、31日（火）の日銀金融政策決定会合において、展望レポートの見通し上方修正やイールドカーブコントロール修正を警戒する声も上がっている。そのため、政策変更なく現状維持だった場合には一時的に円売り圧力が強まり年初来高値を試す展開には警戒が必要。また、仮に政策変更があった場合においては一時的に円高に振れることが予想されるが、前回7月のYCC上限変更時と同様、下落タイミングではドル買い需要が強まり、結局はドル高円安トレンドが継続するのではないか。11月1日（水）、2日（木）に開催されるFOMCにおいては、金利据え置きが想定されている。FRBとしては各種経済指標の結果を見たうえで12月開催のFOMCにて利上げを実施するか判断するとの見方が優勢。ドル/円はイベントを消化しつつ再度ドル買いトレンド継続により上昇するも、年初来高値圏では介入警戒感が一段と強まってくるため上値が抑えられ膠着する展開を想定。今週は1日（水）に米10月ISM製造業景況指数、2日（木）に米9月製造業/耐久財受注、3日（金）に米10月雇用統計、米10月ISM非製造業景況指数といった注目度の高い経済指標の発表が予定されている。

（3）先週までの相場の推移

先週（10/23～10/27）の値動き：　安値 149.32 円　高値 150.78 円　終値 149.65 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部　グローバルFIチーム　田川　順也

(1)今週の予想レンジ:　1.0440　～　1.0640　　156.50　～　159.50　円

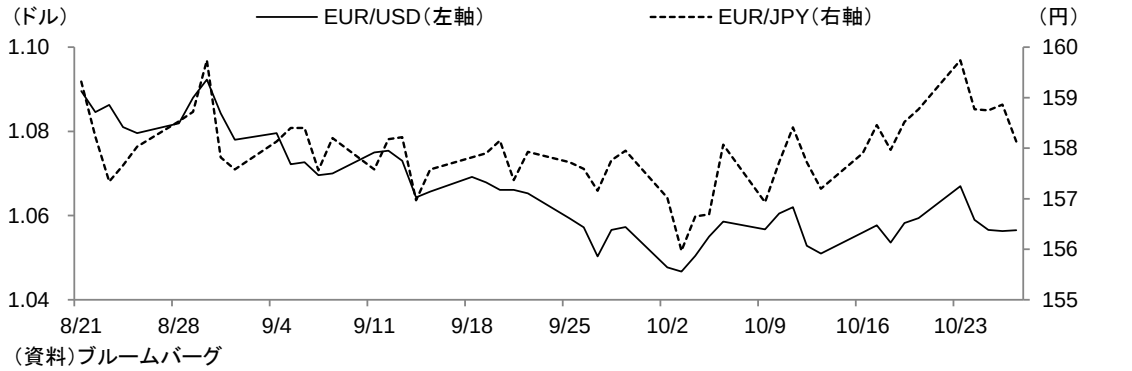
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは上下に振れた。週明け23日の東京市場は1.0590でオープン。東京時間は横ばい推移だったが、海外時間に入ると実需の買いに加えて、米国債利回りが低下するとドル売りとなり、ユーロ/ドルは1.0680手前まで上昇。24日もじり高が続き、1.0695の週高値を示現。ただ、欧州時間では軟調な独経済指標を受け反転下落。ユーロクロスの売りもあり、ユーロ/ドルは前日からの上昇分をすべて吐き出す展開。25日は東京時間は膠着、欧州時間発表された独10月IFOは事前予想を上回る結果となったものの、ユーロ買いとはならず。米債利回り上昇を見に行く展開にユーロ/ドルは1.0570レベルまで上値を切り下げる展開。26日はドル/円が大台150円にのせる中、全般的なドル買いがユーロ/ドルにも波及、上値の重い展開。ECBにサプライズはなく、直後に付けた1.0521が週間安値に。27日はアジア時間横ばい推移となった後、独金利低下を見に行って一旦ユーロ安に振れるも、北米時間で米金利が低下するとドル売り主導でユーロ高。終盤は落ち着いた展開に1.0565で越週となった。

今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を想定。10月26日のECB政策理事会では事前予想通り全会一致で政策の変更はなかった。ECB総裁は判断を保留し、今後のデータ次第では利上げの可能性を排除できないという主旨の発言を繰り返したものの、市場参加者の中で今後のECB利上げを予想している向きはほとんどいないと言って差し支えないだろう。また週末にかけては、エストニア中銀総裁が金利に対し「ピーク」という表現を使ったことが耳目を集めた。加えて、スロベニア中銀総裁も「ユーロ圏のインフレはさらに減速する」とし、ハト派な発言が出た。中銀イベントを通過し、またユーロに対して特段のトレードテーマがない中、ドルが買われる地合いのマーケットの中で、今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を想定しておきたい。ユーロ高のシナリオを強いて想定するとすれば、10月月初につけた年初来安値に近い水準であるため、チャート的に反発する展開と、ドル売り主導になる展開か。いずれにしてもユーロ主導のユーロ高を想定するのは難しいだろう。経済指標では、30日(月)に独10月CPI、31(火)日に独7～9月期GDP、ユーロ圏7～9月期GDP、ユーロ圏10月CPI、2日(木)にユーロ圏10月製造業PMIなどの発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/23～10/27)の値動き:　(対ドル) 安値 1.0521　高値 1.0695　終値 1.0565
(対円) 安値 158.00　高値 159.90　終値 158.12



(資料)ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　中島　將行

(1)今週の予想レンジ:　1.1900　～　1.2400　　179.00　～　184.00　円

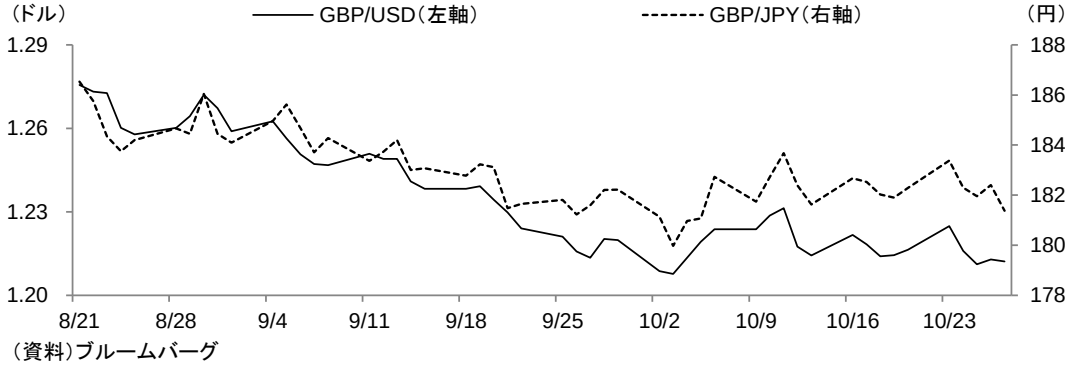
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は10月26日に欧州中央銀行(ECB)の金融政策発表(ほぼサプライズなし)や、2023年7～9月期の米実質GDP成長率(市場予想に対する大幅な上振れ)といった材料をこなしながらも、一週間を通して見ればほぼ対ドル・対ユーロで横ばいの展開となった。米GDPの大幅な上振れに対する為替市場の限定的な反応は意外感があったものの、アトランタ連銀公表のGDPナウが前年比+5.4%と高い予測値を示していたこともあり、実際のGDP速報が前年比+4.9%と市場予想の同+4.5%を大きく上回ったものの、市場の目線は既にアナリスト予想よりも高い結果を織り込んでいたのかもしれない。英国の経済指標では10月分のPMIが注目されたが、結果は製造業が45.2(市場予想44.7)、サービス業が49.2(市場予想49.3)と強弱まちまちな結果であり、市場の反応は限定的だった。

今週1週間のポンド相場は、膠着した展開が継続する公算が大きい。最大の焦点はイングランド銀行の金融政策決定会合である。今会合でBOEは政策金利を据え置くという見方が広く市場のコンセンサスとなっているが、サプライズの余地は小さいだろう。9月会合では据え置き票が5に対し、利上げ票が4と僅差で据え置きが決定された。今会合ではタカ派の論客の一人であったカンリフ副総裁が退任し、ブリーデン氏が新たに参加する。ブリーデン氏の政策姿勢は現時点で明らかではないものの、この1か月に発表された一連の経済統計で賃金・景気の鈍化が確認されたこと、これまでの政策金利の引き上げが時間差を伴って一段と景気へのブレーキとなる可能性を考慮すれば、利上げ票が減ることはあっても増えることはないだろう。BOEは金融政策発表に合わせて新たな経済見通しを公表する。2024年の実質GDP成長率見通し(前年比+0.4%)が引き下げられる一方、スワップカーブに織り込まれた政策金利の引き下げ見通しを反映する形で2025年は若干、増加すると見込まれる。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/23～10/27)の値動き:　(対ドル) 安値 1.2070　高値 1.2288　終値 1.2122
(対円) 安値 181.05　高値 183.76　終値 181.38



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　岩下 義明

(1)今週の予想レンジ:　0.6260 ～ 0.6450　　94.00 ～ 96.50 円

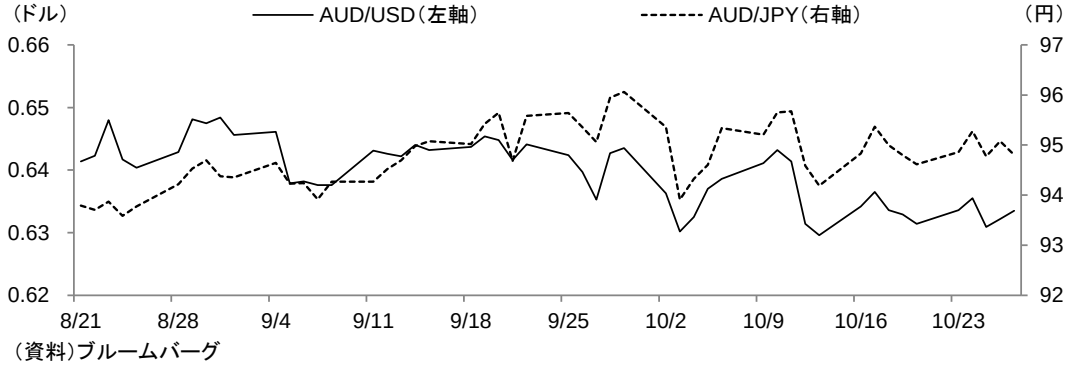
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは強い豪7～9月期CPIで0.64ちょうどを付けた後、0.628を切る水準まで下落。23日、0.6320近辺でオープン後、米金利の上昇を背景に小安く推移。米10年国債利回りが一時上昇し5%を上回ったものの、その後下げに転じるとドル売りが優勢になり、豪ドルは上昇。24日、前日のドル売りの流れを受けて堅調に推移。ブロックRBA総裁が講演でインフレ見通しが大幅に上方修正された場合、追加利上げをためらわないと表明したことも豪ドルの下値を支えた。米10月PMIコンポジットが3か月ぶりの高水準となり、他の主要国比で米経済の力強さが浮き彫りになると、ドル買戻しの流れが強まり豪ドルは0.6530近辺まで売られた。25日、豪7～9月期CPIが予想を上回ったことを受けて買いで反応し、一時2週間ぶりの高値0.64ちょうどまで上昇したが、買い一巡後はじりじりと売り戻された。米9月新築一戸建て住宅販売数が予想以上に増加したことを受けて、高金利が長期化するとの観測が強まり、米金利高、ドル高の流れとなったことも豪ドルの重しとなり、豪ドルは0.6310近辺まで下落。26日、ブロックRBA総裁が議会証言にて前日発表された強いCPIは予想の範囲内と発言したことが材料視され、豪ドルは売りで反応。軟調な株価も重しとなり、豪ドルは一年ぶり安値を更新し0.6271を付けた。ロンドン時間に入り豪ドルに買いフローが入ると上昇に転じ、その後もじりじりと買い進まれた。米国の9月PCEや可処分所得の伸び悩みから米金利が低下に転じたことでドル安の流れとなり、豪ドルは下値を支えられた。27日、豪7～9月期PPIは前年比は前回対比下落するも、前期比は上昇と方向感の見えづらい結果となった。その後は一時下落していた11月RBAの利上げ織り込みが再び上昇するとともに、豪ドルはじわじわと買われる展開になったものの、海外時間では売り戻されて0.6334で越週。

今週は30日(月)に豪9月小売売上高、11月1日(水)に豪9月住宅建設許可数とFOMC、2日(木)に豪9月貿易収支、3日(金)に米10月雇用統計の発表が控えている。FOMCは金利据え置きが市場のコンセンサスとはなっており、直近の高官発言からも利上げは終了したという見方が太宗ではあるが、高金利を背景に金融引き締まりが進む中12月利上げに関してどのようなスタンスか、来年以降の利下げについて材料があるかを注目したい。さらに翌週にはRBAが控えており、現在市場は50%の利上げを織り込んでいる。RBAは豪7～9月期CPIが強かったこと、他国対比政策金利が低いことを考えれば追加利上げの可能性が相応にあり、利上げ織り込み上昇による短期金利上昇に合わせて豪ドルが上昇していく可能性が相応にあると考えている。一方、RBAのそもそものスタンスとして市場のコンセンサス通りの利上げをするとは限らないところにも注意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/23～10/27)の値動き:



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。